わんりぃ

191号

2014/3/1

日中文化交流市民サークル'わんりぃ'
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
http://wanli-san.com/
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp

◆'わんりぃ' HPのアドレスが上記になりました。

【多彩なる貴州の風】　2012年7月、日中国交正常化40周年記念として、中国外務省ならびに文化省の派遣により、貴州民族歌舞劇院が来日し、記念公演『多彩なる貴州の風』を行った。わたしは公演の公式カメラマンとして撮影を依頼された。貴州省は、省面積の55・5パーセントが少数民族自治区域であり、4千万人に近い総人口のなか、少数民族が37・9パーセントを占め、少数民族が他の省より多い地区である。最大の少数民族はミャオ族で、プイ族、トン族、トゥチャ族、スイ族などが続く。わたしはそれらの少数民族の独特の文化を歌や踊りで表現する、舞台芸術の結晶としての『多彩なる貴州の風』に魅了された。

在日華人向け新聞「陽光導報」編集者　劉　怡祥

3月の目次は、最終ページに掲載してあります）

北京雑感その 82

文化の相違

有為楠（ういくす） 君代

１月号で、私は常々メディアの報道に対して感じていることを書かせていただきましたが、勢い余って、深夜のバラエティー番組の中で、乗り物の中で子供におしっこをさせた母親を巡って起った車中の騒動を報道した番組に対して、実際にその番組を見てもいないのに、北京での昨今の印象をもとに、「テレビ局の『やらせ』に違いない。いくら中国でも、今頃は乗り物の座席近くで子供におしっこをさせる母親はいない。ましてやそれを非難した人に、周りから異論を唱える等ありえない」と友人に告げたことをお話しました。

これに対して、四川省在住で、中国四姑娘山自然保護区管理局特別顧問として活躍され、時々、‘わんりぃ’に美しい写真や楽しい現地報告をお寄せくださっている、大川健三さんから、コメントを頂きました。「都会はいざ知らず、私の住んでいる周りでは、上記のような風景は日常茶飯事だ」とのご指摘でした。

中国は広くて、文化にしろ、社会環境にしろ、いろいろな側面があることをすっかり忘れて、自分の知っている変化を中国全土に当て嵌めた失敗です。そんな人間が、メディアの報道を一面的過ぎると批判するのですから、噴飯ものです。深く反省しています。

その反省を踏まえて、今回は、北京で見聞した事実に基づき、排泄に関する考え方を比べてみたいと思います。勿論これもかなり独断的ですが、思いがけない場面を見て、カルチャーショックを受けた上での感想です。

古い日本語では、洗面所のことを「はばかり」と言うように、どうも、日本人には排泄行為を隠しておきたいものとする気質があるようです。余り静かで、衣服を整える音さえも外に聞こえるような気がする洗面所は落着きません。適度なＢＧＭが流れているとほっとします。新式洗面所の、ボタンで流水音が流れる装置を大いに利用しています。これに対して、中国の方々は、排泄行為は当然の自然現象と捉えていて、何も恥ずかしがるものではないと考えておられるような気がします。

中国を旅行すると、北京の郊外ですら、自動車道路のサービスエリアの洗面所は、溝の両側にコンクリートで足場が出来ているだけで、個々の仕切りは全く無いところがありました。使用者は、縦列に並んで用を足すのです。ある時、マイクロバスで旅行中、トイレ休憩でサービスエリアに乗り入れました。トイレ以外は何も無くて、地元の人たちが、果物を運搬用の籠に入れて売っていました。トイレの前に椅子を置いて、地元の女性が缶にお金を入れて座っていました。２角（0.2元）と言うので払って、少し低くなったコンクリートの建物に入ってみると、前述のようなトイレでした。たとえ２角でも、これでお金を取るのはあんまりだと思い、戻って文句を言おうとしたら、その女性はもういませんでした。聞くと、本来、あのトイレは無料なのだそうです。地元の人たちが、勝手に座っていて、だまされた旅行客が料金を払うので、断らずに貰うのだそうです。これは７、８年前のことでしたが、今はそんなことは無いでしょう。

さすがに都会の百貨店やレストランのトイレは、しっかりとしたドアが付いて、きちんとした個室になっています。しかし、どういう訳か、ドアが壊れていることが多いのです。

一度、王府井の百貨店だったかと思いますが、両側に個室が５つずつも並んだ大きな洗面所に入りました。５つ並んだ個室の手前から２番目辺りのドアが開いていて、その前に人が立っていました。中から人が出てくるのを待っているのか、或は丁度これから入るところかと思いました。奥の方の個室は空いているかも知れないと思い、立っている人の後ろを通って奥へ進もうとした時、ドアの開いた個室に人がいて、用を足しながら、外の人とおしゃべりをしているのを見て、思わずのけぞってしまいました。ドアを開けて話しているのは初めて見ましたが、個室の中から、隣の個室、或は外の人と大きな声で話しているのはよく見かけました。こんな所を見ると、ドアが壊れていても真剣に修理しない理由が分かるような気がします。

確かに中国的考え方は合理的ですが、合理性を納得したからと言って、直ぐに中国式考え方に替えることは難しそうです。こんな所が文化の違いと言うのでしょうか。

私の調べた諺・慣用句27

立て板に水

三澤　統

世の中には話すことが大変上手で人々の心をひきつける人がいるものです。本人は何でも良く知っていて、頭の回転も速く、舌の滑りも滑らかで弁舌爽やかです。この三拍子が軽快なしゃべりをもたらすのでしょう。

このような人のしゃべりを指して「彼のしゃべりは立て板に水のようだ」と評します。

中国晋代の“郭象[1]”という人が正にこのような人でした。

“立て板に水”を辞書で調べてみますとそれぞれ以下のように載っています。

▲小学館　デジタル大辞泉：
「立て板に水　よどみなく、すらすら話すことのたとえ」 因みに、詰まりながらしゃべることのたとえは“横板に雨垂れ”と言うそうです。面白いたとえですね。

▲小学館　中日辞典：
中国語では四字熟語の「口若悬河kǒu ruò xuán hé」が“立て板に水”と同じ意味合いを持っています。「口若悬河　口が滝のように流れる；弁舌がよどみないさま；立て板に水」

この成語の出自は〈晋書[2]・郭象伝〉の「听象语, 如悬河泻水, 注而不竭」(話すのを聞けば、滝の水が落ちる如くで、その流れは涸れることがない)の部分です。

郭象は晋代の非常に優れた学者でした。彼は日常生活中で接触する現象に対して、細かく注意観察した後に道理を仔細に考えて、自己の結論を得ていました。それ故、彼の知識は非常に深くて広くあらゆる事柄について独創的な見解を有していました。後に彼は老庄思想[3]にも没頭して、彼らの学説に対して深い理解を示していました。

当時、彼を敬い慕う数多くの人が、彼に官職に就くよう勧めましたが、彼はそれらを全て頑なに断り続け、毎日ひたすら学問に没頭するか、同士たちと哲理の探求を続けることに心の楽しみと満足を得、日々の充実感を味わっていました。

その後朝廷が、再三、郭象の許へ人をよこし、官職に就いて朝廷が執り行う政治に参加して欲しいと請われました。朝廷側のあまりの熱心さに郭象は終に引き受けざるを得なくなり“黄門侍郎”という役職に就きました。

役職に就くと、かれの知識が深くて広く、話の筋道が通っている上、弁舌も非常に冴えています。その上彼が述べる意見や見解は深い考察に基づいて理路整然としておりましたので、人々は彼の話を聞く度に深い感銘を受けるのでした。

イラスト　Ye Lin

当時、王衍と言う大尉が居りました。彼は郭象の学識と弁舌の才を高く評価し、常々、郭象を褒め称えて次のように言いました。

「郭象の話を聞くと、滝の水の流れのように滔滔と流れ続けて、永遠に枯渇する時が無い様だ」

〈注記〉

1) **郭象**(252年～312年)：中国、西晋期の人物。字は子玄。河南の人。若くして老荘思想を好み、清談をよくした。

2) **晋書**：中国晋王朝(西晋・東晋)について書かれた歴史書。二十四史の一つ。

3) **老荘思想**：中国で生まれた思想。道家の大家である老子と荘子を合わせてこう呼ぶ。

(ウィキペディアより抜粋)

怪異シリーズ（30） 十五貫[1] I

hé yuányuán
何媛媛

今は昔、南宋（1127～1279）の時代、都の臨安府（今の杭州市）に劉貴という男がいました。先祖代々富豪として知られた家でしたが、劉貴の代になって、家運がすっかり衰えてしまいました。劉貴の本来の望みは、一生懸命勉学に励み、役人になることでしたが、家の経済状況では、とても劉貴の勉学を支える資力もなくなり、仕方なく、家計を維持するため商売を始めました。しかし、商売も順調に行かず、たびたび大きな損失を出して、結局、大きな家から、小さな家へ移り住んで、終にはその家まで手放し、二、三間しかない小さな家を借りて過ごす始末でした。

劉貴は王氏の娘と結婚していましたが、長い間、子どもに恵まれなかったため、陳氏の女性を妾にいれました。勿論、それは生活がまだそれほど困っていなかった頃のことです。そんな訳で、劉貴一家の生活は貧しいながら、二人の妻はわりと気性の優しい女性たちでしたので、三人一緒に睦まじく日々を送っていました。家では、奥さんの王氏を大姐、妾の陳氏を二姐と呼んでいました。

そんなある日、王氏の父親が誕生日を迎えました。劉貴は王氏と共にお祝いの品や土産物を用意し、都から20里（10キロ）あまり離れた郊外にある王氏の実家に向かいました。家を出る前、劉貴は陳氏に、

「今日は遅いから、帰れないと思うが明日はきっと帰ってくるよ。気をつけてしっかり留守番をして欲しい」

と言い残して出発しました。

義父の家に着いて、祝いの品や土産ものを手渡した後、祝福の挨拶を述べましたが、大勢のお客さんが次々とお祝いに来るので、なかなか義父とゆっくり話す時間がありませんでした。客たちが帰ったあと、やっと落ち着き、義父と劉貴二人だけで杯を交わしながら話しました。

「どうしたらいいのか。あんたの暮らしはなかなか良くならないようだ。「座して食らえば山も空し」[2]というじゃないか。我が娘をあんたに嫁（とつ）がせれば何も苦労なく暮らせると安心していたのだが、今のような状態になるなどと思ってもいなかったことじゃ」

劉貴は頭を深く下げ、

「おっしゃる通りです。私も何とかしたいと思いいろいろ試して見ましたが、運が悪いのか思うような結果になりません。ですからいつもどうすればいいだろうと思い悩んでいるのです」

とため息をつきながら言いました。

「わしはあんたたちの生活振りを傍で見ていられないのだ。娘のためにも、あんたを助けてやりたいと思っているところじゃ。商売の元手を少し用立ててあげるから米薪店でも開いてみる気持ちはないかね。少しでも儲かるようになれば暮らしが立つ。そうなればいいじゃないか」

「それは嬉しいことです。お義父さん、今度こそうまくやります」

そこで、義父は十五貫文の銭を取り出して劉貴に与え、

「まずはこの銭で開店の準備をしなされ。順調に開店に漕ぎつけられたら、開店の日にさらに十貫文あげよう。何はともあれ急いて店をだしなされ。娘はしばらくここで預かることにするが無事に開店の運びになったら、娘を連れて祝いに訪れよう。どうじゃな？」

突然の義父からの申し出に劉貴は涙が出るほど感激し、目の前に用意された大金を大切に袋に納めると、義父に繰り返しお礼の言葉を述べました。そして、その翌日、劉貴は妻と義父に別れを告げ、お金を背負いわくわくした気持ちで帰途につきました。

夕方、地元の町に戻ると、家の近くでたまたま商売をやっている知り合いの人に出会うと、「酒でも飲まないか」と誘われました。ちょうど劉貴も商売についての話を聞きたいと思っていたところでしたので誘いに乗り、一緒にお酒を飲みながら、どうすれば上手に米薪店を開けるか話し合いました。

劉貴は元々お酒に弱い性質（たち）で四、五杯、杯を空（あ）けると、頭がふらふらになってきました。それでも酔ってはいけないと心に念じ、知り合いと別れを告げて

ヨロヨロした足取りでどうにか家に辿り着きました。

妾の陳氏は、日が暮れるとすぐ玄関をしっかり閉じ、ウトウトしていました。暫くすると門を叩く音が聞こえ、急いで門を開けました。劉貴は陳氏の顔を見るなり、ちょっと興奮した口調で言いました。

「ね、君、これ、なんだと思う？」

陳氏は不思議に思って、その重い袋を受け取り紐を解いて中を覗いてみると、なんと、沢山のお金が入っているではありませんか。彼女は吃驚して口を大きく開け、夫を見つめて訊きました。

「こん、こんなたくさんのお金、どこから貰ったのですか？　何に使いますの？」

劉貴は酒に酔っている上、お金が手に入った嬉しい気分も手伝って、突然陳氏をからかう気になりました。

「どこから貰ったというのかね。聞いたら、怒るんじゃないかな」

「なんで怒るなんていうの？　ひょっとして盗んだものですか？」

「いや、俺はものを盗むような人間じゃないよ。分かってるじゃないか」

「いったいどんなお金なんですか？　早く言ってくださいよ。盗んだものでなければ怒ったりするはずないじゃありませんか」

「じゃぁ、絶対怒らないでね。実は君を娶ってから、豊かな生活もさせられず、常にすまない気がして、どうすれば君たちに満足に思ってもらえるだろうかといつも考えていた。今日、たまたま金持ちの知人に出逢ってね、その知人が結婚相手を探しているって言うんだ。それで君を彼に売ってしまった。君が彼と結婚するのは君にとってもいい事だと思いながらも、申し訳ないことをしたという気持ちもあってお金は沢山貰わなかった。ま、こんな程度で帰ってきたが、このお金で商売をして儲けたら、君を必ず買い戻す、儲けられなかったら、これでお別れだ」

劉貴は恰も本当の話のように述べました。

陳氏にとっては寝耳に水の話で信じられません。普段陳氏は、夫や奥さんの王氏との仲もよく、不愉快なことも無く、平和に過ごしてきました。貧しいとは言え、飢え死するほどでも無いのですから、自分をお金に換えなければならないほどとは思えません。なんでいきなりこんなひどい仕打ちをするのかと陳氏は信じられません。しかし、お金は確かに机の上にあります。陳氏は劉貴を問い詰めました。

「お姉さんはどうして帰ってこないの、どこでお酒を飲んだの」

「お姉さんは君と別れるところを見ていられないと言うので、実家に残してきたよ。知人がお酒をおごってくれて飲みながら、売買の契約を結んだ。明日、知人が家に来て、君を連れて行くから、持って行きたいものを用意した方がいいだろう。どうも今日は疲れた。俺も早く寝なきゃぁ」

と劉貴は言いながら、お腹の中でこっそり笑いを堪え、服も脱がないまま横になって寝てしまいました。　（続く）

〈注記〉

1）**十五貫**：古代のお金、丸く真ん中四角い穴があり、紐で通して纏め、1000枚で一貫という。一貫はおよそ今の人民元の200円になります。

2）「働かないでいれば、豊富な財産もやがてはなくなるものである」の意。

‘わんりぃ’は、毎年4月から新年度になります。ご継続をよろしくお願いします。尚、新年度の会費の納入は、3月一杯にお願いできれば有難いです。また、新入会を 歓迎します。

年会費：1500円　入会金なし
郵便局振替口座：0180-5-134011　‘わんりぃ’

‘わんりぃ’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりぃ’を発行し、情報の交換に努めています。

入会されると

①年10回おたよりをお送りします。

②‘わんりぃ’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100　（事務局）

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりぃ’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

通化市と集安 その2

寺西 俊英

前号の終わりに、「高句麗に関して最後に一つ書き加えたい」と書いたが、それは700年の栄華を誇った高句麗のその後が日本においてどのような形でつながって行ったかについてである。

前号で述べたように668年に、唐と新羅の連合軍により滅亡したわけであるが、一部の遺民は靺鞨(まつかつ)[1]と組んで渤海(698年～926年)を建国した。もちろん捕虜として唐に連れ去られた人たちもかなりの数に上った。一方で日本に亡命した高句麗人も多数いた。日本では彼らのことを「高麗人(こまひと)」と呼んだ。国が滅亡した時だけでなく、それ以前から高句麗の人々は日本に渡り渡来人として各地で暮らしていた。彼らは大陸における高度な技術や文化を数多く伝え、日本の文化水準の向上に多大な貢献をしてきた。

716年、日本は奈良時代であったが時の律令政府は、関東一円に住んでいた高麗人1799人を集め武蔵国に「高麗郡(こまぐん)」を設置した。当初の高麗郡は現在の日高市と飯能市を中心に置かれている。そして初代郡司には高句麗の王族とされる「高麗王若光(“こまのこきしじゃっこう”と読む。以下“若光”とする)」が就任した。

その後鶴ヶ島市(全域)、川越市、入間市、狭山市の一部が高麗郡に加わった。しかし明治19年(1896年)に入間郡に編入され、惜しくも高麗郡の名は消え去った。それでも高麗村と高麗川村が存続していたが1955年に両村が合併してなぜか日高村になり、さらに1991年に日高市に移行して現在に至っている。

なぜ歴史ある“高麗”という地名を残さなかったのであろうか。なお、2016年は高麗郡を設置してちょうど1300年に当たるため日高市は、高麗人達の業績を永く後世に伝えるため「高麗郡建郡1300年記念事業」を行う。

今日1300年の長きに亘る歴史を偲ぶ縁でまず挙げられるのは、高麗神社であろう。私はこの神社は知ってはいたが訪れたことがなかったので、昨年11月下旬に行ってみた。私は自宅から車で行ったのであるが、高麗神社は電車で行かれる方はJR八高線の高麗川駅が近い。

高麗神社の周囲は長閑な田園風景が広がり、往時を懐古するのに相応しいところである。近くを高麗川が流れている。この川は秩父に源を発し高麗神社の近くを南西から北東に流れ、それから坂戸市で越辺川に合流し、最終的に荒川に流れ下っている。

神社の入り口には「高麗神社」と彫りこまれている大きな石柱が立っている。側面には「朝鮮総督・陸軍大将　南次郎　書」と書かれていて政治がこの神社に深く関わっていたことが窺われる。朝鮮総督府は日韓併合の年、1910年の8月に設置され、南は第7代目の総督になった人である(在任期間1936年～1942年)。

参道に歩を進めると、まず目に入るのが左右一対の白色の柱で、その上部には人面が彫刻され、下部には「天下大将軍」と「地下女将軍」の文字が書かれている。この柱は、JR高麗川駅前と西武線高麗駅前にも置かれていた。気になるので何の意味を持つものなのか、ネットで調べてみた。要約すると次のように解説が載っていた。

▶◀▶◀▶◀▶◀▶◀▶◀▶◀

将軍標(チャンスン)といい、朝鮮半島の農村部に見られる。村と村との境界線であり、村を守る守護神でもある。人面が怖い顔をしているのは悪い鬼を追い出して人々を守るためと言われている。日本における将軍標は高麗神社のものが有名である。

▶◀▶◀▶◀▶◀▶◀▶◀▶◀

たまたま、‘わんりぃ’会員でもある松林浄蓉さん著の「枝散華」を田井さんからお借りした。その本の中で、著者の松林さんが、

「『天下大将軍』『地下女将軍』と書かれた大きなトーテムポールのような柱を目の前にすると異次元に来たような気持になります。二十年前に韓国旅行をした時に見た、農村の入り口などに立てられていた境界標だったことを思い出しました」

高麗神社・参道に立つ将軍標（チャンスン）

高麗神社の本殿

と書かれているが、都会ではなく農村でよく見られるのであろう。私は韓国には数回旅行したが、その時にはあまり興味を持たなかったからか将軍標は見た記憶がない。次回韓国旅行の機会があれば是非見てみたい。

さらに本殿に向けて歩いていくと、杉の木立が続く。その根元には日本と韓国の名の通った方々の記念植樹の立札が並んでいる。一つひとつ見ていると「出世明神の由来」と書いた説明板の前に来た。なぜ出世明神と言われるようになったのかは次のように書かれている。

〈高麗郡総鎮守として郡民の崇敬を受けてきた当社は、近代に入り水野錬太郎氏、若槻礼次郎氏、浜口雄幸氏、斎藤実氏、鳩山一郎氏等の著名な政治家が参拝し、その後相次いで総理大臣になったことから、出世開運の神として信仰されるようになった。（以下略）〉

上記５名の中では水野錬太郎氏は総理大臣にはなっていないが、朝鮮総督府・政務総監や内務大臣などを歴任している。また斎藤実は朝鮮総督のあと総理大臣になっている。その他の人は直接には朝鮮に関係のある役職にはついていない。その３人はなぜ高麗神社に参拝したのかわからない。しかし政治的には重要な神社であったことは間違いなかろう。

まもなく本殿が見えてきた。本殿の手前にある門の上部に扁額が掛かっている。これが少し変わっているのである。高麗神社と大きな字で書かれているのであるが、高と麗の字の間に小さな「句」の字が書き入れてある。

本殿に掲げられた扁額に小さく“句”の文字がある

さっそく社務所で聞いてみると、「実は明治33年（1900年）に、高麗および李氏朝鮮時代の特権階級貴族であった両班（ヤンバン）の子孫である趙重應という方がこの神社を参拝しました。その時この方に高麗神社と書いてもらうよう依頼したところこのように書かれました」ということであった。句の字を入れることにより高句麗という国を偲ばれたのだろうか。

本殿の前で二礼二拍一礼をした後、若光の菩提を弔ってある聖天院という寺院に向かった。聖天院には高麗神社から５分も歩けば門前に到着する。そこにはやはり一対の将軍標が立っている。高麗神社のそれとはデザインが異なっている。

境内に入るとなかなか立派な寺院で、庭園などの手入れも行き届いている。聖天院は751年に創建され、若光の守護仏・聖天尊を本尊とした真言宗の寺院である。入り口である雷門のそばに「高麗王廟」と書かれた祠がある。この中に若光の墓がある。高さ２メートル余りの石塔で砂岩を５個積み

上げた墓が鎮座していた。千年以上の時の流れを感じさせる墓である。異国の地で葬られた若光の魂は何を思っているであろうか。境内を歩いていたら慰霊塔が見えてきた。前が広場になっていて周囲に何体かの石像がある。一つひとつ見ているとなんと私の好きな広開土大王があった。鎧を纏った私のイメージに近い石像で満足した。

さて、1300年の歴史を偲ぶ縁で、もう一つ挙げなければならないところがある。それは神奈川県の大磯である。

実は若光は716年に武蔵国・高麗郡の郡司として行く前にはこの大磯に居住していたのだ。彼は666年に日本に派遣され、大磯に上陸した。高句麗が唐・新羅の連合軍から激しく攻められていた時で、日本に援軍を求める使命を帯びて来たようだ。ところが来日2年後に祖国は滅び、日本に留まるしかなくなった。そして716年律令政府が武蔵国に高麗郡をつくることを決めた時、高麗人を取りまとめる郡司に人望の厚かった若光に白羽の矢が立ったわけである。

この大磯周辺には高句麗になじみの深い場所がいくつかある。まず大磯町には住居表示が高麗という場所が残っている。そして近くに標高167メートルの高麗山（こまやま）がある。高句麗からの渡来人が居住し集落をつくったことから高麗山の名がついたと言われている。この山の麓には高来神社があるが、もとは高麗神社と呼ばれていた。明治30年に改称されたという。

その高来神社に1月24日に行ってきた。行く前に大磯に住む友人に電話したところ、「タカク神社？」と言って一瞬考えた後、「高麗神社のことだろ。地元の人は高麗神社と言ってるからタカク神社ではピンと来ないんだ」と言うのである。

どんな立派な神社だろうと期待して行ったのであるが、着いてみると思ったより小さな神社で人気はなく、日高市の高麗神社を見たせいか随分質素な佇まいである。将軍標（チャンスン）も立っておらず、説明板がなければ高句麗と関係ある神社とは思われない。神社のすぐ裏手からは高麗山への登山道がある。男坂を登りきると頂上は開けていてそこにはその昔、社殿があったとのことだが今は礎石が点々と申し訳程度にあるだけである。

高麗山を背にした、大磯の高来神社
（地元の人たちは、高麗神社と呼んでいる）

若光さんの魂はあの世で嘆いているのではなかろうか。

関西には百済とゆかりのある地が多いし、越前から能登にかけての港は渤海の使節の交流拠点であった。いずれにしても九州は言うに及ばず、日本各地に朝鮮半島や大陸とのつながりがある。現在の日中韓の膠着した状況を見るとき、このような歴史を顧みることは大切なことではなかろうか。

高句麗についてかなり長く書いたが、このあたりで「通化市」の話に戻ろう。

2009年3月20日は集安市内の「豪江大酒店」というホテルに泊まった。友人が通化市はワインが有名だと言うので夕食時にワインを注文した。ワインの良し悪しを言うほどの知識は私にはないが、酒の好きな友人がおいしいと言うので、いいワインに違いない。バスから見る沿道にはブドウ畑は確認できなかったがどこかで栽培しているのであろう。街の北側に近代的なワインの醸造所があるらしい。満州国時代（1932年建国）から人気であったそうだから、さすれば一世紀くらいの歴史があることになる。通化市はまた後述するように朝鮮人参の産地としても有名である（集安は通化

市の一部で、県級市[2]であるが、当稿では別の都市として扱った)。

我々は、3月21日の朝、集安のバスターミナルから通化市中心部に向けて出発した。約2時間バスに揺られて、ようやく市内を分断するように流れている渾江(フンジャン)という大河のそばに着いた。

このあたりで通化市がどのような街なのか概観してみよう。

通化市は吉林省の西南部に位置する地級市であり、少し古い統計資料で恐縮であるが2004年は226万人と日本では大都市に相当するくらいの人口がある。通化師範学院という日本語学部もある大学がある。本来であれば明るい話題や名所旧跡(集安市は既述の通りだが)を案内したいところであるが、私の知る限りそのようなものはあまりない。

この都市は旧満州国との関わりや戦争に関する事柄が多く、通化市の人には申し訳ないが良いイメージの都市とは言い難い。旧満州国時代には通化省の省都でもあったのである。そして後述するように約一週間と極めて短時間ではあったが、満州国の最後の首都となった。関東軍司令部も置かれたのだ。通化事件(1946年2月3日発生=1945年に戦争が終わってからもこの街で痛ましい事件が起こった)も発生した。

19世紀末から20世紀前半は、戦争を抜きに語れないが、事実として我々が知っておくべきことは多い。 (つづく)

〈注記〉

1) **靺鞨(まつかつ)**:中国の隋唐時代に中国東北部(現在のロシア連邦・沿海地方)に存在したツングース系農耕漁労民族。(ウィキペディア抜粋)

2) **県級市**:中国の都市の位置付けは、格上から、①省級市(省都)、当然各省に一つだけあります。吉林省で言えば長春市、②地級市、次に大きい市で吉林省では通化市、吉林市などです。地級市は大きな都市なので一つの省にはあまりありません。③県級市、地級市より小さな市で比較的たくさんあります。以上3通りあります。その下には鎮などの町や村があります。

中国の笑い話 13(「365夜笑話」より)

第33話:他人のことに口を出すな

陳さんは、常々子供に言っていた。

「自分に関係の無いことには関わるんじゃないぞ! 余計なおせっかいは焼かないことだ」

ある日、陳さんはキセルで一服した後、キセルを叩いて吸殻灰を落とし、そのまま上着の飾り帯にキセルを挟んで立ち上がり、子供を連れて近くの親戚の家に出かけた。

キセルに灰がまだ残っていたようで、陳さんの飾り帯が燃え出したが、それには気が付かないで、前を向いて大股で歩き続けた。

子供はそれを見て、父親に言おうと思ったが、何時も父親に言われていることを思い出して言えなかった。それで恐る恐る訊ねた。

「お父さん、話したい事があるんだけれど、話しても良いですか?」

陳さんは訊ねた。

「それはお前と関係のあることかね?」

「僕とは関係ありませんけれど。」

「お前と関係の無いことなら、口を閉ざしていることだ。」

息子は仕方なく黙っていた。

飾り帯の火はますます大きくなるので、息子は我慢できず、又訊ねた。

「お父さん、一つ言いたいことがあるんですが、話してもいいでしょうか?」

陳さんは又訊ねた。

「お前自身のことかね?」

「いいえ」

陳さんは怒って言った。

「お前と関係ないのに、何を話そうっていうんだ!」

父親の機嫌が悪いのを見て、息子は黙ってしまった。

又暫くすると、飾り帯の火は、陳さんの腰の周りを殆ど一回りしそうな勢いになったので、息子は我慢しきれなくなって、大声で叫んだ。

「お父さん!あなたの飾り帯が燃えていますよ!」

(有為楠 訳)

光陰矢の如し。六戸町に参ってからもう一年も経ってしまいました。お蔭様で、この一年間で様々な交流と体験ができました。私はもう一年六戸町にいることになりましたので、これからの一年間も町民の皆さまどうぞ宜しくお願いします。

私は去る二月二十日に「ろくのへ生涯学習フェスタ2005」で中国紹介コーナーを設置し、前回の町民文化祭と同じように中国展を行いました。その他に図書館から借りた「中国悠遊紀行」の週刊誌を二十冊ぐらい展示しました。この週刊誌は中国の自然、文化、歴史などを紹介しています。私はこの週刊誌の精美な写真、豊富な内容にすっかり引かれています。

この週刊誌の裏表紙に掲載している某航空会社のツァー広告を見ると、以前のことを思い出します。中国国際旅行社の時、このツァーの山西省コースのガイドも何回もしました。参加者達の中国の歴史や文化に対しての興味深さ、詳細さに敬服したのです。時々、図書館から「中国悠遊紀行」のような中国を紹介している本を借りて読んで、中国講座の時にも皆さんに紹介しています。

中国紹介コーナーの前で、私は皆さんから中国へ行った時の経験談を聞いたり、「中国悠遊紀行」によって皆さんに中国を紹介したりしました。前回の町民文化祭の中国展を見て当時の中国展の作品集が気になって今回もまた訪ねてきてくれた方もいました。それで中国書画などについていろいろと話し合いました、中国紹介コーナーを通じて小さい国際交流ができて嬉しく思っています。

同じホールには押し花などの体験学習コーナーがありました。私は指導の先生の親切な誘いを頂いて体験してみました。説明によりますと先生は何年か前に中国を訪問し、押し花の交流を行ったことがあるそうです。当時の状況を意気揚々と説明してくださいました。中国では多くの人々が押し花に興味をそそり、とても人気があるそうです。体験当初、先生から「手先が器用」との褒め言葉をいただきましたが、小さい花びらを使う作業は自分の手元ではなかなか難しいものでした。

先生の丁寧な指導の下でやっと一つしおりが出来上がりました。自分の手によって出来上がったしおりは手放したくありませんでした。私の表情もこの押し花のようになったでしょう。

以前、中国で押し花の年賀状を一回出したことがあります。もちろん購入したものですが、もし、自ら作れば、格別有意義な事になると思い続けていました。ようやくこの生涯学習フェスタで押し花の体験ができたのは予想外の得がたい経験でした。

その他に茶道などのコーナーも見て回りました。午後に多目的ホールで披露された地元の伝統舞踊はさすがの無形文化財でした。「津軽三味線の魅力」も確実にその名の通り魅力が有りました。生涯学習フェスタ 2005 は円満に終了しました。

「鄧さん頑張る・日本探検記」は、2004年（平成16年）から2006年（平成18年）の2年間、青森県六戸町の国際交流員として国際友好活動にかかわった、中国山西省太原市に住む一中国人・鄧仁有さんの日本体験です。文章は原文のままです。

智子の雑記帳100

最終回になりました

2003年3月から始まったこの欄は、今回100回を迎え、最終回となりました。番外編を加えて、100以上の駄文を、快く載せてくださった「わんりぃ」の懐の深さ、暖かさ、自由さ、言葉にならないいろいろなものに、改めて、本当にありがとうございました。

勧められるままに書き始めた10年前と今は、そんなに変わっていないと思いたいけれど、私のなかではすっかり世界は変わりました。2011年3月11日以来、この社会はたくさんの人たちの努力によって成り立っていて、ちょっとしたアクシデントで、日常が保てなくなるということを知りました。一方で、何があっても、人は日常を守ろうと行動し、そして、いつか社会は日常を取り戻していくのだということも知りました。

いろいろなことがあって混乱した3年前、とにかく目の前のことをひとつずつこなしていくしかないと言い聞かせて、仕事や家のことをやっていくうちに、世の中は落ち着いていったのでした。

計画停電で、信号も電車も止まり、暗いなかで窓からの光を頼りに仕事をしていた職場の風景は、異様でした。帰り道、同僚の女性4人で、車も人も少ない道を、一緒に帰りながら、そのなかの一人が涙ぐんでいたのを、あとの3人は気が付かないふりをして、黙って歩いていたのを思い出します。泣いても仕方ないじゃないか、と思いながら。

思えば、‘わんりぃ’は1992年に活動を始め、間もなく22年になるそうです。きっとそれは、多くの方々が、活動を愛し、守り、育ててきたからで、ものすごく気高いものをそこに感じます。いろいろなことがあったはずの間に、変わらずに何かを続けてこられることは、得がたい幸せなことで、そこに100回以上参加できたことを、ありがたく、尊く思います。

（真中智子）

最終回に寄せて

真中智子さんは連載100回を数えましたか。ひとまず区切りでペンを置くそうで、‘わんりぃ’読者としては残念ですが、暖かく見送りましょう。

彼女との出会いは、2002年末の大手旅行会社の雲南省旅行です。10人以上集まらないと成立しないそのツアーは、私の仲間が6人で、他のメンバー4人という、少人数の思い出深い旅行でした。大学を卒業して社会人ほやほやの真中さんはふっくらとして可愛く、雲南料理の辛みに負けて、口の周りを腫らしたのもさらに可愛らしかったです。筆が立ちそうだと私が目をつけ、田井さんも後押しして‘わんりぃ’に投稿してもらうようになりました。

真中さんの原稿は、はじめは中国関係の書籍紹介でした。やがて彼女の関心が中国以外に向いたためかアジア関係の書籍紹介になりました。当初の題名「中国を読む」は内容合わせて単に「読む」となりました。最近では書籍紹介を離れて、身辺雑記になり「智子の雑記帳」になっています。

わんりぃ誌上での彼女の原稿はオアシスのようにみずみずしく楽しく読めます。そして高齢者の多い‘わんりぃ’投稿者の平均年齢を下げるのにも貢献しました。

可能なら、みずみずしい真中さんの文章に再びお目にかかりたいものです。（佐々木健之）

中国人は、「民族より文化」を優先する

陽光新聞社・顧問　塩澤宏宣

中国は多民族国家です。56の民族の集合体ともいいますが、漢族が92％と圧倒的に多く、残りの1割弱が55民族になります。ちなみに1,000万人以上の民族はチワン族と満族だけです。中国では少数民族問題はタブーで、一般的には中華民族というくくり方をします。

歴史書を読むと、黄河流域（中原）で古代文明を築いた人たちを漢族といい、やがて周辺諸民族（東夷・西戎・南蛮・北狄）をいつの間にか漢族に巻き込んでいる、とあります。私たち日本人にとって「中華民族？」はしっくりしません。元（蒙古族）や清（満族）ばかりでなく、中国を最初に統一した秦の始皇帝も西戎民族という説もあり、隋・唐の王朝も鮮卑といわれています。王朝を築いた民族が多様であれば民族にこだわることはあまり意味の無いことで、「民族より文化」というのは当然かもしれません。

度々利用しますが、王敏さんの著書「中国人の愛国心」によれば、「元は中国文化を無視したから奸夷（敵）であり、清は伝統文化を利用・保護したから味方だ」といいます。続けて「日本は侵略し、中国文化を軽視したから奸夷（外国に対する最大の蔑視）だと中国人が思っている」と述べています。

過日、私が顧問をしている北京企業の社長（友人）が70歳を越えた今、塩沢さんは何を考えているか？　という問いがありました。私はその問いに対して、孔子様の教えに従って生きてきたか否かを反芻していると、論語の一節で答えました。そのときの社長の腰を抜かさんばかりの驚きを今でも覚えています。皆さんご存知と思いますが、念のために記してみます。

「……四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而従心所欲、不踰矩」

この意味するところは、……四十で判断に迷いが無くなった（不惑）。五十で天が与えた使命がわかった（知命）。六十で人の言葉が素直に聞けるようになった（耳順）。七十で自分の思うとおりに行動しても行過ぎることが無くなった（従心）。

中国は、日本の「歴史問題」を非難していますが、ここにも認識に大きなズレがあります。

私の経験で恐縮ですが、歴史の勉強は苦手でした。勉強する範囲は大学受験のためでした。入試問題が想定されるところだけを覚えておけばいい、でした。

最近、「歴史問題」とは何か？　について勉強を始めましたが、中国が問題視するのは日清戦争以降から終戦までの約50年間のようです。

再び私事ですが、父は戦前の職業軍人で中国・満州が専門でした。終戦後10年間、旧ソ連に抑留されて帰国後のある日、「中共（当時の呼称）とは国交がないが、やがて仲直りするときが来る。その時はお前たちが先頭に立て」と言われました。

定年退職後、私が中国留学生OB（卒業後日本で働いている）を指導したこともその一環ですが。彼らは一様に「日本文化」を賞賛します。私はその際いつも言ってきたことは「日本文化のルーツは中国にある」と説教していたことを思い出します。

今改めて「論語」を初め、「孫子」「三国志」…最近は諸子百家等々を濫読していますが、そこで感じることは「中国の歴史」と「日本の歴史」には規定に大きな違いがあるということです。

中国の歴史書は事実の記載にプラスして「編者の主観」が入ることです。史記から始まる膨大な歴史書は皇帝が入れ替わった場合、次の皇帝が

前の時代を書く慣わしでした。権力を奪い取った者が前皇帝のいい事を書くはずはありません。つまり、中国では歴史を記述する「ひと及びそれを認める時の皇帝」ですが、問題は、歴史を記述するに当たっての誤認識がそのまま継承されて行くことです。このような歴史の記載のありようは現代にも修正されずに続いています。

中国の愛国教育の方針に基づく「教科書」には多くの誤った記載があります。これらは留学生の指摘で分ったことですが、彼らも来日し、勉強を始めた瞬間にビックリしたことです。

一方、日本でいう歴史は史跡・遺物などの証拠を前提にした事実を述べ、評価はしません。上記の事実だけでも、日中の歴史観に相違があることが判りますし、中国の歴史観の中に誤認識による事実が紛れ込んでいる事が理解できると思います。

顧問をしている陽光新聞は創立11周年を迎えています。長年にわたってコラムを書いていますが、今年から「兵法三十六計」を始めました。昔の兵法を現代ビジネスに置き換えるとどうなるか、という視点です。以前は「論語」と「孫子の兵法」を書きました。論語では現代政治を、孫子の兵法では現代ビジネスの絡みを書きました。毎回わが身を振り返ると昔の中国の偉人はすごい業績を残したものだと感心するばかりでした。それも毛沢東による文化大革命で全てが否定されました。日本における明治維新や終戦時と同じ様に。

今、世界はニッポンブームと聞きますが、ブームはやがて消えてゆく運命を意味します。そうならいようにするために「日本の文化」として国民が自覚し、育成・定着させる必要があるのではないでしょうか。

中国は現在、軍事力で威嚇し、カネで味方に引き入れようとしています。一方国内を見ればマダマダ貧しい農民たちがいっぱい溢れています。GDP世界第2位なんて誇っていますが、1人あたりのGDPはどうか？誇り高い中国人ですから「文化の力」を自覚すればカネはいらないし、元々ベースには素晴らしいものがあるのですから…台湾に行くたびに故宮博物院に行きましたがその素晴らしさには圧倒されたものです。さすが蒋介石！ です。

中国が本当に文化に目覚めれば、手ごわい相手になるでしょう。中国はあの文化大革命によって世界に誇る中華文化を否定し、破壊してしまいました。その文化大革命が終了して40年近く経過しました。「文化力」は「軍事力」より強いことは論を待つまでもありません。

中国人が自国の伝統文化の価値を再認識して中華文化再建をはかれば、やがて世界の目は「脅威から感嘆の目」に変るでしょう。経済の発展でゆとりが出来れば「文化力」がつくことは日本が証明しています。日中文化競争の時代が早く来るよう念願して止みません。

【付記】

昨今の日本観光についての報道には、いささか疑問があります。中国人観光客が大量に「炊飯器」を買ったなどなど。中国人をカモのように扱う語調です。それらの品々はすぐれた製品だから人気があるのですが、なぜすぐれているのか、それは日本人のきめ細かい心配りやおいしさを追及しようとする探究心があるからです。その気持ちは歴史を遡れば、遠い昔の祖先に行き着きます。いい製品を作る基盤には、こうした日本の歴史文化があるからである、ということまで報道する側は考慮して欲しいと思うのですが。そうしたことが中国人に理解されれば、買う人たちも「文化という付加価値」を理解してくれるでしょう。そして、やがては自分たちの文化を掘り起こし、いいモノづくりに励むようになる。そうしたきっかけが日本に来る中国観光客の真のオミヤゲになるのではないでしょうか。

スリランカ・ケラニヤ便り ⑩

大学での日本語教育

為我井 輝忠（ケラニヤ大学人文学部現代外国語学科・日本語教師）

2012年12月から昨年12月までの1年間スリランカのケラニヤ大学で日本語を教えてきた。1年ほどの短い期間であったが、この1年間を振り返ってレポートしたいと思う。

スリランカには大学の数が20数校あり、すべて国立大学である。その中で専門的な日本語学科があるのはケラニヤ大学とサバラガムワ大学である。もちろん他にも日本語や日本に関する初歩的な講座がある大学はコロンボ大学をはじめいくつかの大学にあることはあるが、正式な日本語学科があるのは上記の2校のみである。

スリランカでは教育費は公立ならば小学校から大学まですべて無料で、個人的な費用のみを払うだけである。私立の学校はすべての費用は払わなければならないので、余程の金持ちでもない限り私立学校に行く学生はほとんどいない。

この国では日本語を学ぶ学生は数の上ではそんなに多いとは言えないが、一番人気のある外国語だと言えるだろう。ただ、最近は中国語や韓国語を学ぶ学生が増え、ケラニヤ大学でもこれらの言語を学ぶ学生は増加している。

その理由として、中国と韓国のスリランカへの進出がある。これらの言語を知っていれば、就職するのに有利だという理由であるが、それだけでなくこれらの国は中国語や韓国語を学ぶ学生に奨学金を与えて自国への留学を積極的に進めていることがある。日本はこうした面で遅れているような気がするが、どうだろうか。テレビを見ていると、毎週1回のようだが、それぞれ中国語と韓国語の語学講座が行われている。かつては日本語講座もあったようだが、今は行われていない。

学生には留学や研修で日本へ行く機会も与えられているが、その数はやはり限られている。2、3年生の中には日本語を学んでいる学生でありながら中国と韓国に留学する学生が毎年何人もいて、帰国後はこれらの言語を教えていたりしている例もある。

私が教えていた学生たちの中で、東京外語大学、金沢大学、埼玉大学、宇都宮大学、創価大学などの大学に留学した例もある。その他にも短期の研修旅行で出かけた学生もおり、彼らは帰国後日本語能力が一段と目覚ましいことは言うまでもない。

ケラニヤ大学日本語学科でもう一つ気が付いたことは日本語学科が有する設備が古いことだ。LL教室があるが、これはもう20年以上も前にJICAの寄付で作られたもので、今では全然機能を果たしておらず、わずかにパソコンをケーブルでつないで映画や映像を見ることができるだけである。

1年生全員と共に（筆者前列中央）

中国語や韓国語学科は最新の設備を備えた教室をそれぞれ持っていて、それに比べると日本語学科の貧弱な設備には驚くばかりである。中国語教室には一人一台の割でパソコンも備えられている。幸いにして、日本語学科では来年度には新たな設備を持つＬＬ教室が作られるという話を聞いた。

このようなことはさて置いて、ケラニヤ大学での実際の日

帰国前の送別会にて

本語教育について述べてみたいと思う。

ケラニヤ大学は３年制だが、日本語学科は全体で130人位いる。学生の98%は女子学生で、男子学生がほんの数人いるだけだ。日本語教師は日本人が５人（私を含めて）、スリランカ人が５人いる。私が担当した教科は「漢字」（１年生と３年生の各２時間）と「日本文化」（１年生と２年生の各１時間）で、計６時間である。他に「会話」、「読解」、「日本語教授法」、「文学」、「文法」の授業があり、別の先生方が教えている。

都市部の高校ではどこででも初級・中級程度の日本語教育が行われているので、学生達は大学に入る前に日本語を数年間習ってきており、すでにA Levelの段階（日本の高校卒業段階と同じ）の能力がある。従って、ある程度の知識と能力は持っているが、ほとんどの学生は漢字が苦手だと言いながらもかなり読むこともでき、音読み・訓読みの区別も分かる。ただ書き順や細かい部分の書き方などが微妙に分からないようで、黒板に書いてもらうととんでもない書き順で書いている学生がいたりする。テキストはKanji in Context（Japan Times 出版）を使ったが、学生はすべてコピーしたものを使用していた（違法コピーになると思うが）。

「日本文化」についてはテキストのようなものはないので、すべて私が考えて作った。例えば、日本料理、茶道、折り紙、NHK紅白歌合戦、正月、映画、アニメ、スリランカ料理を日本人に紹介する、といったようなテーマを私が作った画像や日本から持参したビデオなどを用いて紹介し、それらを基にさらに学生に調べさせ、まとめをし、発表するというようなことを行ってきた。学生は料理、ファション、映画、アニメなどに関心があり、大いに役立ったようである。

学生は概ね意欲的であるが、やはり能力的に多少の違いはある。また、おとなしいというかシャイな学生が多く、質問などもこちらが聞いてやらないとなかなか尋ねこれはてこないということが多かった。これは国民性にもよるかもしれない。

スリランカの学生は語学的センスが良いのかどうかわからないが、２年位勉強すると、話すことは概ね問題なく話せるようになる。シンハラ語と日本語が文法的な面や発音が似ているという面もあるのかもしれないが、上達が早い。日本の大学生が中学･高校ですでに６年間も英語を勉強していながら、話すこともできないのと対照的である。

この１年間は私にとっては楽しくもやりがいのある期間だったと言えるだろう。

文化や習慣の違いに戸惑いながらも、何とか有意義に教鞭をとることができたのもスリランカという国とその人々への関心があったからだと思っている。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を 1cm ほどを残して切り取り、おついでの折に田井にお渡し下さい。

【‘わんりぃ’の原稿を募集しています】

‘わんりぃ’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられてます。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。

又‘わんりぃ’の活動についてのご希望やご意見及び‘わんりぃ’に掲載の記事などについても、簡単なご感想をお寄せいただけれと存じます。

日中文化交流市民サークル‘わんりぃ’

ぼくが見て感じたスリランカ紹介 75

コロンボ国立博物館とその界隈 その1

赤岡健一郎（日本スリランカ武道協会 日本スリランカ文化交流協会）

今回はコロンボ７地区にあるコロンボ国立博物館界隈の話をしましょう。

シナモンガーデンと呼ばれるコロンボ７地区は、各国大使邸やスリランカ人セレブ達の豪邸が立ち並ぶ高級住宅地として知られています。それと共にコロンボ国立博物館や国立自然史博物館、アートギャラリー、英国植民地から独立へ導いたバンダーラナーヤカ首相の業績を展示した博物館、中央図書館等があり、隣接した地区にあるコロンボ大学も含めて文教地区でもあります。ここは植民地時代にはシナモンの栽培が盛んだった事からエキゾチックな響きのある、シナモンガーデンと呼ばれています。実は僕の家もこの地区にありました、豪邸ではありませんよ！

スリランカで最も歴史があるといわれる「ゴール・フェイス・ホテル」（ゴール・フェイス・ホテル公式HPより）
スリランカ都市開発公社が管理する、インド洋に面したコロンボ市内最大のオープンスペース・面積５ヘクタールの芝生のゴール・フェイス・グリーンという緑地に近接し、ホテルでもこの緑地でも大洋に沈む雄大な夕日が眺められる。

主要なホテルがあるフォート地区やペター地区からコロンボ国立博物館までは直線距離で約４～５Ｋｍほどなので歩いてもたかが知れています。是非ともブラブラと散歩してみては如何でしょうか。

インド洋に沿ってと言うと大袈裟ですが、先ずはホテル街から海岸線に沿ってゴールロードをコルピティヤの信号まで南下してみましょう。

スタートすると直ぐ海側に 1864 年創業のゴールフェースホテルが姿を現します。創業当時の雰囲気をそのままに残しているコロニアルスタイルのホテルで昭和天皇も宿泊された格式のあるホテルです。

このホテルの中にある「ベランダ・レストラン」ではビュッフェスタイルではありますがハイ・ティーを楽しめます。国立博物館までの散歩のスタートに如何でしょうか。紅茶なんてと思う紳士淑女の方々には同ホテル内のインド洋に面したレストランでスリランカの生ビールはどうでしょうか。少し辛めのスリランカのおつまみ、そしてインド洋から伝わってくる微かな波のささめき。この海の先には何があるのかな、なんて思いを巡らせて飲むと生ビールの味が数倍も上がりますよ。

ここで時間を盗られると、その日のうちに国立博物館までたどり着けないのであまりお薦め出来ないのですが、一日はゴールフェースホテルの海に面したテラスでインド洋に落ちる夕日を眺めながら「頭の中を空にする」時間を過ごすのが僕は好きです。

さて先に進みましょう。ゴールロードの両側にはスリランカのスナックや甘～い紅茶とコーヒー、スリランカカレーが売り物の昔ながら飲食店から、今風のお洒落なカフェテラス、インターネットカフェ、本格的な日本料理の店まで揃っているので、途中で散歩に飽きたり、疲れたり、お腹がすいたり、喉が渇いたりした時には何時でも一息つける場所があります。

夜のお散歩が好きな向きの方には、英国風のパブのような店や、いかにも怪しげなバー、カジノ等がありますので自己責任の範囲内で夜のお散歩をするのも楽しい事でしょう。このエリアには最近になってブティックや雑貨品店等も多くなってきているのでウィンドーショッピングやお土産物を探すのにも面白い場所になって来ています。海側には政府観光局があるので、スリランカ全体の旅情報を入手する事も可能です。

以前にも本誌で紹介しましたが、ゴールロードを歩いていると幸運か、不運かにも依りますが、色々と個

性的な人と話しをする機会に出くわす事が多くあります。何が目的なのか判りませんが日本人の名刺をトランプマジックの様に拡げて、たくさんの日本人の友達がいる事を自慢する人。同じ様に日本人の名刺を見せて寄付を強要する人、この人の持っていた名刺には「この人を信じてはいけない」と日本語で書かれていた事がありました。じっくりと話を聞くと直近のレートを知らない闇両替屋もいましたね。もっと凄いのは初対面にも関わらず、数か月後に日本に行くから仕事を紹介してくれと臆面無く言ってきた輩がいました。

難しい事は、中には純粋に日本語の勉強のために話しかけて来る人もいるので、その見極めです。勉強目的の方々は往々にして日本語がまだ上手ではありません。これに対して上記の個性的な方々は、場数を踏んでいるのでしょう、結構流暢な日本語を話します。最初の内は本音を話しません。しばらく話をしていると、脈がありそうだと感じるのでしょう、突然脈絡なく主目的を話始めます。僕ら側の対応としては、ここで躊躇する必要はありません、即座に席を立つ事です。

勉強目的の方々は遠慮がちに話をしてくるので好感が持てます。状況によっては、この後のお散歩の案内をお願いしても良いでしょう。観光客は勿論の事、駐在員でも知らない新しい店の情報や話題を得る事が出来るかもしれませんね。ただし、この場合でも何らかの金品や見返りをおねだりしてきたら、即座に断りましょう。逆に最後まで何もおねだりが無い場合には、軽い食事などを御馳走してあげる事も大事です、生涯の友人を得る事になるかもしれませんよ。

毎度の事ですが脱線続きで国立博物館までたどり着けませんでした。現段階で道半ばと言ったところでしょうか。次回には何とか国立博物館界隈まで辿りつきたいものです。

サハ共和国・ヤクーツクだより ⑨

杉嶋俊夫

今回はまた視点を変えて、サハやシベリアと日本との「接点」に触れてみます。

◆サハと、日本のマスメディア

まず最初に「ニュース」をお届けします。今月（2014 年 2 月）はサハが 2 回もテレビで取り上げられました。

この文章が掲載される頃にはすでに放送は終わっていますが、今月中にレナ川の石柱自然公園に関する番組も予定されています。この僅か 1、2 年の間にテレビだけでもよくサハ共和国の名前が登場するようになりました。こうしてサハの自然や文化が日本で紹介されることを嬉しく思います。

ただ、やはりどうしても「寒さ」に焦点を当てた内容のものが多くなってしまうので、そろそろ冬以外のシーズンやヤクーツク市の様子も取り上げてほしいものです（まだヤクーツクは「オイミャコンへ行くための経由地点」程度の扱われ方しかされていないようです）。春や夏の美しさはことばでは言い表せないほどで、そうした魅力も伝えてくれることを望みます。

◆サハやシベリアの先住民に関する研究

まだあまり知られていないのですが、サハからさらに視野を広げてシベリア極東地域に目を向けると、じつは日本には地道にこの地域の言語や文化に取り組んできた研究者がかなりの数いらっしゃいます。

特に言語に関しては「なぜ日本にこれほど多くの研究者が？」とびっくりしてしまうほど研究者が“揃って”います。サハ共和国に住む少数民族ユカギールの言語の日本人研究者は二人もいます（ちなみにユカギールという名前は、マンモスや、最近では若者の間で大流行したファンタジーソーシャルゲーム「神撃のバハムート」のキャラクターにも使われています）。

また、日本の某大学ではサハ語の勉強会が始まったとか。本当に時代が変わりましたね。数年前に出た本のタイトルにもなっている「日本語の隣人たち」がこれほどバラエティーに富んでいることはもう少

し知られてもよいような気がします。

サハの先住民に関する日本語で読める文献も増えてきています。特に高倉浩樹氏の著作『極北の牧畜民サハ』、『シベリアとアフリカの遊牧民』（共著）もお勧めです。同じ高倉氏による編著書『極寒のシベリアに生きる』は、サハ（とその周辺地域）に様々な分野の研究者が取り組んだ労作です。学術的な内容ですが読みやすく、お勧めの一冊です。

◆サハからもらった宿題

私も、この２ヶ月の間にサハで見聞きしたことを別の角度から考えてみる機会が何度かありました。まだ学び始めて間もないので触れるのはメモ程度にとどめますが、ひとつは「暗さ」ということです。私が現地に滞在したのは冬の終わりから夏にかけてのシーズンで直接体験することはできませんでしたが、真冬は昼間の明るさが数時間という時期もあるそうです。電気がなかった頃、暗い中でどうやって人々は時間を過ごしたのでしょうか。そんなことを考えている時、『くらやみでもへっちゃら』（絵本、絵・長野ヒデ子、文・桃井和馬）に出会いました。桃井氏はあとがきの中で、人間は暗闇の世界があったおかげでじっくりとものを見、食卓で話をし、自然に対する畏怖の念も抱くことができたと述べています。

もうひとつ私が関心を持つのは「寒さ」です。荻原真子氏は、採集狩猟漁労という「原理的に最も動物に近い生き方」をしてきたシベリア先住民だからこそ自然の一部としての自覚を持ち続けたのと対照的に、日本では食べ物を「押し戴く」気持ちが失われてしまったことに触れています（石井正己編『昔話にまなぶ環境』収録の「シベリア先住民の神話・昔話」）。

ヤクーツクの北東連邦大学の（元）同僚によると、サハには客を大切にもてなし、じっくり話を聴く伝統があるそうです。「寒くて暗い」世界だからからこそそのような豊かさが育まれたのでしょうか。

日本に帰ってきてはや半年が経ち、タイトルに「たより」という言葉を使うのが一段と気が引けるようになってきました（笑）が、こうしてサハからいただいた宿題はこれからも考えていきたいと思います。

日本語で読める文献　サハの先住民に触れている文献は、大学図書館の一般開放サービスなどを利用すると、ほとんど全て町田市内で読めてしまいます。本当にありがたいことです。

ロシアで出版されている文献　ロシアでもサハ文化に関する出版活動は盛んです。写真は左が『古代ヤクート（サハ）人の世界』（フランス語の報告書からの露語訳）。右が『ヤクート（サハ）の民族衣装』。

杉嶋俊夫 略歴:東京都町田市生まれ。千葉大学卒。大学で認知心理学を専攻、途中で言語学に転向、シベリア先住民の言語を学ぶ。院在籍時に西シベリア・トムスクの大学に留学したことがきっかけで、トムスク市やロシア西部・リャザン市にある大学で日本語を教える。今回の派遣も、リャザン大学の時と同じ日露青年交流センターの派遣プログラムによる。

映画「北朝鮮強制収容所に生まれて」
（3月1日から渋谷・ユーロースペースで上映）

2012年製作/ドイツ映画/カラー・106分
監督：マルク・ヴィーゼ

ジュネーブ人権映画祭最優秀映画賞/オスロ・ヨーロッパドキュメンタリー最優映画賞/IFFブカレスト最優秀政治映画賞/その他

2014年2月19日（水）の朝日新聞1面、ソチ五輪でジャンプ団体が第三位に入ったというニュースの傍らに、国連の北朝鮮人権調査委員会が、17日、人権侵害に関する最終報告書を公表し、「政治犯収容所での処刑や北朝鮮政府による広範囲な人権侵害を認め、『人道に対する罪』に当たる」と初めて判断したとありました。

厳しい監視下の北朝鮮政治犯収容所からの脱出は皆無に等しいといわれています。その、数ある政治犯収容所の中でも最も厳しい監視下に置かれている北朝鮮政治犯強制収容所第14号管理所は、生涯に亘って出所することが許されず、死ぬまでそこで働かされる人たちを収容する『完全統制区域』です。この収容所で“表彰結婚”注）の結果として生を受けた子どもであるシン・ドンヒョクは生まれながら父母と同じ政治犯として扱われ育ちました。

2005年、23歳になったシン・ドンヒョクは、高圧電流の流れる鉄条網を潜り抜け、その後のいくつかの僥倖により中国へ脱出しました。彼は14号収容所から脱出できた唯一の人間であり、その後、彼の収容所での生活は、多くの人権活動家達に知られるようになりました。

シン・ドンヒョク自身の記録「収容所で生まれた僕は愛を知らない」（KKベストセラーズ）、米国人ジャーナリストであるブレイン・ハーデンとの対談形式で取材された「北朝鮮14号管理所からの脱出」（白水社）、又上記ドキュメンタリー映画「北朝鮮強制収容所に生まれて」などによって、あまりにも非人道的な人権無視の実態と強制収容所内の過酷な生活が、彼の証言によって明らかになってきたのです。

有り得ないようなその証言は、その後、脱北者、かつて収容所にいたことのある者、韓国の人権弁護士や韓国のジャーナリスト他から信憑性のあるものと認定されたことが、国連の北朝鮮人権調査委員会を動かし、上記の報告書の発表に繋がったそうです。

さて、映画「北朝鮮強制収容所に生まれて」は、本人へのインタビューをもとにドイツ人監督が描きだしたドキュメンタリーで、映画では脱北した元北朝鮮の秘密警察員と、虐待、拷問、処刑を行っていた保衛員にも取材。衝撃的なシーンは、モノトーンのアニメーションで描いています。

個人的にはこの類の話は好きではありません。むしろ目も耳もふさいで逃げたい。21世紀を迎えて既に15年近くなります。ホロコーストをはじめ、20世紀の様々な類似の歴史的事実への反省が生かされず、今も尚、このような事実が現実として少なからず地球上にあるのは許されません。

今、日本は世界の中でも平和度は高いといえます。自由に自分の考えを発言できる自由は何ものにも代えがたいことです。その日本でも、戦前・戦中には政治への自由な発言は許されず、闇に葬られた事件が沢山ありました。特定の者たちが政治権力を持つ恐ろしさは、権力者がその権力を維持したいと思ったときに始まります。中国の文化大革命や天安門事件でも不穏分子は痛めつけられあっさりと葬られました。

教育も権力者にゆだねられたとき、教育本来の目的からはずれ、洗脳の道具として彼らの権力の保持に都合の良いようにゆがめられてしまいます。80歳近くなった私世代（昭和10年生）より上の年齢層は、権力下の教育の恐ろしさを太平洋戦争で体験済みです。映画は、生まれたときから外の世界を知らずに育つ無垢の子どもに、恐怖と共に叩き込む権力者のご都合主義教育の恐ろしさ伝えています。

平和ボケなどといわれている間に黒い影が忍び込んで来るかもしれません。その意味で、特に若い皆さんには心して見ていただきたい映画だと思います。

たまたま、招待頂いて見る機会を得た映画でしたが、以前、‘わんりぃ’でも上映した、任書剣さん監督の「北朝鮮の夏休み」（2005年）で映し出された、優しく素朴な北朝鮮の市井の人々と、戦争中に私が疎開した村の人たちをダブらせ胸を痛めたことでした。

（田井光枝）

注）収容所内の規則を良く守り、よく働く模範的な収容者同士を年に数回、保衛指導員の指示で結婚させる制度。収容者達の労働意欲かき立てる奨励制度と位置づけられているが夫婦は共に生活する事は許されず、子どもは「人民学校」を卒業すると母親とも引き離され労働力とみなされる。

◇‘わんりぃ’活動報告

‘わんりぃ’2014新年会

シュワンヤンロウ(羊肉のシャブシャブ)で新年を祝おう!

2014年2月2日(日)　場所：麻生市民館料理室

新年会は、殷秋瑞さんの京劇風挨拶で始まった

留学生達も楽しそう

今年も2月2日、‘羊肉のシャブシャブ・シュワンヤンロウ’のお鍋を囲んで、‘わんりぃ’恒例の新年会が開催されました。

開催間際になっての参加申し込みが例年に増してどっと増え、定員を超えてしまいました。常連で毎年お出で下さっている皆様も含めて心ならずも何人かの方の申し込みをお断りしなければなりませんでした。深くお詫び申し上げます。

今年は留学生の参加も多く、例年に増して若やぎ華やいだ新年会でした。京劇俳優の殷秋瑞さんや‘わんりぃ’に毎号、中国の古い物語を執筆下さっている何媛媛さんをはじめ、久しぶりに、日中水墨協会会長の満柏さん・‘わんりぃ’にイラストを寄稿下さっている叶霖さんご夫妻が、愛息二人とご一緒に参加下さったり、中国笙演奏の銭騰浩さんは奥様同伴でと、家族でのご参加は嬉しい事でした。また、チベット僻地を撮影の烏里烏沙さんや秩父の山西省友好記念館・神怡館の館長さんなど遠来の客もあり、「和」と「輪」の‘わんりぃ’にふさわしい新年会でした。

例年同様、お鍋タイムでは湯気の立つお鍋を囲んで会場のあちこちで話がはずみました。今年初

湯気の立つお鍋を囲んで会場のあちこちで話の輪が広がる

アンデスの民族楽器・ケーナを吹く山下孝之さん

キルギスの民族楽器コムズを演奏するケレザさん

馬頭琴演奏の永瀬正博さん

めて参加の皆さんもシュワンヤンロウの美味しさに舌鼓を打たれた事でしょう。

恒例の余興タイムでは、山下孝之さんによるアンデスの民族楽器・ケーナ演奏、キルギス留学生のケレザさんがキルギスの民族楽器・コムズの演奏と永瀬正博さんの馬頭琴演奏。最後は、東北応援歌「花は咲く」を一緒に大きな声で歌い、加えて笙演奏の銭騰浩さんの歌唱指導で中国の古い民謡「茉莉花」歌いました。初めて聴いた銭騰浩さんが歌う声は温かみがありとても良かったですよ。

続いてこれまた恒例の、ビンゴと福引で笑い合い、‘わんりぃ’ならではの新年会は、今年も和気藹々とした雰囲気の中で終始し、最後は、河本さんの威勢の良い音頭で、「三本締め」で無事に終了しました。

（報告：田井）

余興タイムのメは「花は咲く」「茉莉花」を一緒に歌う

ビンゴ風景

福引カードに書かれたメッセージを読む。景品は何？

「窓花―中国の切り紙　黄土高原・暮らしのフィールドワーク」
～黄土の大地に咲く、紙の花々～

2014年02月28日(金)～2014年03月16日(日)(無休)
11：00～19：00
於：(公財)せたがや文化財団・生活工房
世田谷区太子堂4-1-1　キャロットタワー
東急世田谷線「三軒茶屋」下車すぐ前

会期中の催し：
上映会「ヤオトン造りの小さな取決め」(事前申込み不要)
監督：エロディー・ブロッソー／DVD／90分／中国語／日本語字幕
ヤオトン造りの過程を撮影し、2012年のジャン・ルーシュ国際映画祭で無形文化遺産賞を受賞したドキュメンタリー映画。上映後にはゲストによるミニトークもあります。

問合せ：(公財)**せたがや文化財団・生活工房**
電　話：03-5432-1543
FAX：03-5432-1559

◇わんりぃの催し　中国語で読む・漢詩の会

▲場所：**まちだ中央公民館・学習室7**
▲月日：2014年4月13日(日)
▲時間：10：00～11：30
▲講師：植田渥雄先生(現桜美林大学孔子学院講師)
▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
▲定員：20名(原則として)
＊録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎050-1531-8622(有為楠)
E-mail:ukiuki65@yahoo.co.jp(同上)

◇わんりぃの催し　ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう！

◆動きやすい服装でご参加ください
▲3月25日(火)：まちだ中央公民館・6F視聴覚室
▲4月25日(火)：町田市民フォーラム3F・視聴覚室
▲時間：10：00～11：30
▲3月の練習歌「どこかで春が生まれてる」
▲4月の練習歌「翼を下さい」
▲講師：Emme(エメ)(歌手)
▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
▲定員：15名(原則として)

●**申込み：**☎042-735-7187(鈴木)
E-mail：wanli@jcom.home.ne.jp(田井)

【2014年3月の定例会】
◆定例会：3月10日(月) 三輪センター第3会議室
13：30～
◆4月号おたより発送日:3月30日(日)三輪センター
10：30～　お弁当を持参下さい。

岡上中国語研究会新会員募集

中国語を中国人先生から直接聞いて話して勉強してみませんか？ 中国語初めての方大歓迎。直接見学も大歓迎。
●毎週土曜日 10:00～12：00
●麻生市民館岡上分館（215-0027 麻生区岡上 286-1）
●講師：劉　冠群先生（北京出身）
●会費：月謝 3,500 円
●お問合せ：☎ 044-988-2031（本間(ほんま)）
E-mail: tizm2008@jcom.home.ne.jp.（和泉(いずみ)）

'わんりぃ' 191号の主な目次

北京雑感(82)文化の相違 ……2
諺・慣用句(27)「立て板に水」……3
媛媛讲故事(61)「十五貫」 ……4
中国-城市めぐり(31)「通化市と集安・2」……6
「中国の笑い話」(13) ……9
日本探検記(11)「生涯学習フェスタ2005」……10
雑記帳100「最終回になりました」……11
智子の雑記張、最終回に寄せて ……11
中国人は、「民族より文化」を優先する ……12
スリランカ(75)「コロンボ国立博物館とその界隈1」…14
スリランカ・ケラニヤ便り⑩大学での日本語教育…16
サハ共和国・ヤクーツクだより⑨ ……17
映画「北朝鮮強制収容所に生まれて」……19
'わんりぃ' 活動報告・2014新年会 ……20
わんりぃ' 掲示板 ……22

関東各地に降った、2月の記録的な大雪には驚かされました。ベランダにも尺を越す雪が積もり、雨戸の溝にも相当量の雪、慌てて家中の雨戸を閉めました。自然の力の前に油断は禁物と改めて感じた事でした。(田井)